J-SIP-B150

M8-14

産業界から見た専門教育実践型インターンシップの成果と課題

○福田 理恵（富士ゼロックス西日本株式会社　システムエンジニアリング部）
吉田 謙一（富士ゼロックス京都株式会社　マーケティングサポート部）
玉田 春昭，荻野 晃大（京都産業大学　コンピュータ理工学部）
穂崎 良典（京都産業大学 キャリア教育研究センター）

０．専門教育実践型インターンシップ

富士ゼロックス西日本株式会社には，専門教育実践型インターンシップ（以下：IS）として４名の学部４年生を受け入れて頂いた．京都産業大学側から見た本 IS の成果と評価は[1]で述べているように，学生の際立った成長が見られた．一方で，この IS の取り組みは，初めてのものであり，教員のスタンスや開催時期が次年度以降の課題として挙がっている．次年度に向けての課題を整理する意味でも，大学側からの視点だけではなく，企業側からの視点も不可欠である．そこで，本稿では，企業側から見た本 IS の成果報告と振り返りを行うものである．

１．はじめに

これまで文系を中心とした仕事体験型のISは富士ゼロックス京都株式会社にて受け入れていましたが、理工学系コーオプ教育は初めての取り組みとなり、地域の統轄会社である富士ゼロックス西日本株式会社　システムエンジニアリング部にて、受け入れをする運びとなりました。

本 IS では、弊社の商品『音声ガイドサービス』をプラットフォームとした新たなアプリケーションの提案を IS の柱のテーマに据えました。そして、IS のテーマと研究テーマを掛け合わせてプログラムを組ませていただきました。

2016 年 3 月から 3 ヶ月間、週一回弊社に就業し、全 11 回で商品の新たな価値を検討しました。

プログラムの前半では、弊社の企業理念・ビジネスゴール等を学び、商品知識を習得し、SWOT 分析、マーケティング手法から、商品のコンセプトや市場のニーズを理解するためのプログラムを取り入れました。
そこでは、IS 生が日々研究していることが、社会でどのように求められているのか、という客観的視点を得ることができたという声がありました。

続いて，商品の新たなサービス案のアイデアを創出するために、今宮神社様（京都府北区）にご協力をいただき、アイデアソン（アイデア×マラソンによるアイデア創出）を開催し、富士ゼロックス社員とゼミの学生（IS 学生の友人たちが中心）も含めて総勢 25 名が参加し、そこから『俳句・川柳投稿システム』が創出されました。

その後、アイデアの深堀や、サービスのコンセプト、ターゲットの検討を繰り返し、私たちのお客様企業にもご協力を頂き、関係企業へプレゼンテーションを行いました。そこで、文化継承や開発者の視点から様々な反応を得ることができました。

IS の最終回では、発案したプロジェクトを『てくよみ！』と命名し、弊社の開発拠点（横浜）で関連部門へプレゼンテーションを行いました。開発関係者から具体的な指摘を受けて、多くの気付きを得ることができたとの声が IS 生から上がりました。

２．企業としての成果

２．１　職場の活性化と若手社員の育成

若手社員が IS 生への指導を通して、自分自身を律した行動、及び商品知識を「知っている」から「使える」知識として習得できたという効果があります。また、習慣化された職場の矛盾やアイデアを学生が発見することで、企業としても気付きを得ることができました。

２．２　企業 PR

このような IS は、社会貢献としての学生の育成という視点だけではなく、IS 生に企業の実情、企業風土を理解してもらう絶好の機会と捉えています。

広く社会に開かれた企業の姿勢は、優秀な人材の発掘・確保にも結びつきます。

２．３　就職におけるミスマッチの解消

IS を通して、学生が社会との関わり方、企業の姿勢や、働くことを身近なものとして捉えられるようになると考えます。そして、仕事や働くことに興味を持つことにより、これまでとは異なる企業の見方や価値観が醸成され、就職に際してのミスマッチ解消に繋がると考えております。

２．４　産学の連携構築

IS 生の受け入れを機に、学校の企業に対する理解が深まり、交流の機会が生まれております。また、卒業研究の一環であるため、そこから企業と先生方との様々な研究分野において産学連携の可能性が構築できると考えております。

３．企業としての課題

３．１　学生の研究テーマと企業の事業内容との合致

理工学系コーオプ教育は初めての試みだったため、学校・企業の両者からしても、研究テーマの理解、商品やサービスの理解が難しく、必ずしも研究テーマに沿った商品と結びつけられるとは限らないと考えております。関連性が見出すことが出来ない場合に、いかに IS 生に実践的な仕事の内容に近づけられるかが課題の一つと捉えております。

３．２　企業との事前擦り合わせによる IS プログラム設計

３．１で述べたとおり、企業と大学のお互いの理解が初期段階の状況で完全に共有できておらず、長期に亘るプログラム設計が見えないということが想定されました。企業としては人員の確保が必要であり、参加する IS 生としても、IS のプログラム全体が見えない中参加を決めなければいけません。そのため、学生に対して、IS プログラム内容の充実度や魅力に繋がるかが課題と考えております。

３．３　社内の理解

IS 生の受け入れにより、通常業務とは異なる対応が必要となりますが、関係者以外の社員も積極的な関わりを持ち、IS の取り組みに協力する姿勢が必要だと考えております。

４．まとめに変えて

最後に、企業として課題はあるものの、IS 生は、本 IS プログラムを通して、企業への理解は勿論のこと、多角的な視点、社会とのかかわり方、研究内容と社会ニーズ、IS 生同士でのコミュニケーション、自分の意見や主張を的確に伝えるスキル等、多くの気付きを得ることが出来たのではないかと考えております。

企業としては、企業への理解が深まり、就業意欲があり優秀な人材の確保に繋がる取り組みだと考えておりますので、引き続き IS プログラムの質を向上させていきたい所存であります。

【謝辞】

本インターンシップにご協力いただいた富士ゼロックス西日本株式会社　猪田　孝弘氏，長山　利樹氏、田中　睦子氏、渡邉　新一郎氏、富士ゼロックス京都株式会社　芝田　二郎氏、村田　守夫氏に深く感謝いたします.

【参考文献】

[1] 玉田 春昭，荻野 晃大，穂崎 良典，``専門教育実践型インターンシップの開発と試行''，日本インターンシップ学会　第 17 回大会，September 2016.